

文学研究(古典)

咲本 英恵

源氏物語と、その享受作品としての中世の物語を研究している立場から見て、2012年に発表された論文の中から、表現の研究として興味を持った次の4本を紹介したい。

高橋早苗『源氏物語』の「たぐひなし」一紫のゆかりの女君たちをめぐって—(『中古文学』第90号)は、従来解釈に揺れを持つ桐壺巻の「たぐひなし」を光源氏による藤壺賞賛表現として特徴的な語彙であるとし、それがのちに紫の上に対しても用いられることで、「光源氏の人生に深々と横たわる、「紫のゆかり」をめぐるふたつの恋」を象徴するとした。また若菜下巻で柏木が女三の宮を賞賛する時にも「たぐひなし」が使われることで、「たぐひなし」が柏木と光源氏の「密通の恋」の繋がりを浮かび上がらせ、しかも女君の内実を理解し得ない男による女君への賞賛表現に変化しているともいう。ある人物に限定的に使用される「意図的な形容表現という観点」にさらなる表現探求の可能性を示したものであり、表現研究の重要性をあらためて考えさせられた。

内藤英子「好忠歌と女流文学—『紫式部集』を中心に—」(『古代文学研究第二次』第21号)は、好忠歌が平安女流歌人に撰取されていく様相、とくに紫式部集における「雪」や「深山辺」「憂さ」「埋もれ」等の和歌表現における好忠歌の影響を論じる。曾禰好忠は説話や公家日記などにしばしば奇人として現れる、歌風の新奇

さを特徴とする歌人である。内藤氏は、平安女流歌人がそのような好忠の和歌表現を撰取したところに、「男性文学への執心」を指摘し、さらに好忠歌の源氏物語へ影響をも示唆する。

平田英夫「和歌の起源をめぐる序文の言説をめぐって」(『日本文学』61.7)、岡崎真紀子「勅撰和歌集序という論理——『千載集』から『新続古今集』へ——」(同)は、ともに勅撰和歌集序文における間テクスト性を論じ、千載集序に触れる。

平田氏は、古今集仮名序の「このうたあめつちのひらけはじまりける時よりいできにけり」という言説が中世期にさまざまに意味づけられ、表現されていくなかで、千載集序において天地開闢の時が「神代」という抽象的語彙によって表されることに注目し、そこに仏法の権威を利用して和歌を称揚する俊成の意図を読み取る。岡崎氏は古今集仮名序「生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける」という言説が、千載集序で「この世に生まれと生まれ、我が国に来たりと来たる人は……この歌を詠まざるは少なし」と変奏されるが、そこに天竺発祥の仏教を意識することで和歌をわが国のものとして認識するという俊成の意図を読む。そしてこの俊成の仏教的な解釈は、一条兼良による新続古今集序では、儒学的語彙がその表現に取り入れられつつ、君臣和楽思想に変奏されるという。両氏が指摘した、俊成の歌道即仏道という和歌観によって勅撰集序の型が変奏されるさまは、変容・改作・パロディを積極的に許容していく中世文芸の在り方を考えるうえで示唆的であった。

(共立女子大学)